
超能力を喰らうモノ 弐

左リュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超能力を喰らうモノ 弐

【Nコード】

N0256Z

【作者名】

左リユウ

【あらすじ】

前作、「超能力を喰らうモノ」の第二弾です。

超能力、というモノがある。

そして超能力を使う人の事を、超能力者と呼ぶ。

俺、ほしかわそうきち星川左右吉はまさにその超能力者だった。

高校一年生の夏休み。

俺はある少女と出会い、自分の能力を発現させた。

しかし、その代償として、その少女の能力の大半を喰いつくしてしまったのだが。

アビリテイ・イーター
能力喰い。

これが、俺の超能力。

能力を喰う能力。

まず言うと、超能力とは本来誰にでも使えるモノだ。しかし、大半の場合は個人の中に、開花されない才能のまま眠っている。

そして、俺の中には能力喰いアビリテイ・イーターが眠っていた、というワケだ。

その少女、月姫つきひめ麻友はその超能力を開花（というよりも覚醒）させる能力を持っている。しかし、俺の能力を開花させた瞬間、俺の能力喰いアビリテイ・イーターが彼女の能力の大半を喰い尽くしてしまった。

よって、他にもあったらしいその能力は現在では失われ、今はせいぜい能力の（不安定な）開花程度しか使えないらしい。

超能力は先程、誰にでも使えるモノではなく、大半が開花されない才能のまま眠っている、と言っただろう。しかし、中には『無自覚能力者』というモノが存在し、自覚はしていないが、無意識に能力を発動する能力者の事だ。

これになまじタチが悪い。

何しろ本人には自覚が無いのだから。

しかし、麻友の能力で開花させ、暴走する能力を俺の能力喰いアビリテイ・イーターで

喰ってやれば、その人は能力を自覚し、少しずつ、コントロールする事が出来るようになる。

例えば。

「あ、月姫さん、星川君おはよう。見て。少しずつだけど、こうやって指から火を出せるようになったよ」

せながわめくみ
瀬名河恵。

我が学園の（というよりクラスの）一年四組の委員長にして超能力者。

発火能力。

簡単に言えば、火を起す事が出来るようになるわけだ。

先日。

瀬名河はまさに『無自覚能力者』だった。

しかし、俺が能力喰いで暴走する能力を喰った事により、こうして火を起せるようになり、徐々に超能力をコントロールしつつある。付け加えるならば、見た目も可愛い。

「おいバカやめろ。無闇やたらに能力を使うなよ。他の人に見られたらどうするんだ」

「あ、それもそうだね」

そう言うと、瀬名河は火を消した。

後で麻友に聞いた話だが、こうして自由に火を点けたり消したり出来るのには、通常は一ヶ月はかかるらしい。

どんなペースで能力をモノにしているんだ。コイツは。

その内家一軒丸々燃やせそうだぞ？

「.....」

相変わらず、麻友は反応が無い。

うーん。コイツももう少し表情豊かになってくれれば助かるのだけれども。

しかし、麻友は転校初日からかなり評判がいい（特に男子の）。

大人しい正確なのだが、ぶつちやけて言えば可愛いし、麻友の転校初日に唯一あがった悪い評判といえ、俺が麻友を屋上に連れ込んでよからぬ事をしかけたという事ぐらいだ。

ははっ。勿論これは真実じゃあ無いぜ？ さらに俺は校内で口リコン扱いされてはいるが、これも違うぜ？ しかもなんだか最近委員長にして校内で美少女と評判の瀬名河と親しくしていたからって男子共に殺気を向けられてなんか無いんだからな？

「おっはよー左右吉。相変わらず怖い雰囲気かもしだしちゃってえ」

「出してるつもりはないぞ。そんなはた迷惑な雰囲気」

「おやあ？ 美少女転校生に美少女委員長も一緒じゃないですか」

「因みにお前はなんなんだ」

「大人の色気のある美少女」

「大人の色気（笑）？ 皆無だろ」

フツ、と鼻で笑ってやった。

なかうしろまな
中後真菜。

クラスメイトにして友達。

因みに幼児体形。

「あア！？」

因みに本人は幼児体形である事を気にしており、こうやってその事について触れるとグレる。

「んだとコラア！？ コンクリ詰めにして東京湾に沈めたるかア！？」

「このシリーズの短編、二作目だからってそうやって必死になってキャラ作りしてんじゃねーよ。ほら（なでなで）」

必殺なでなで攻撃。

こうしてやるとコイツは落ち着くのだ。

キャラ設定が増えてよかったな。

しばらくすると、すぐにコイツは大人しくなった。

ホラな。

「なるほど。こうやって星川君は女の子を手中に収めてるんだね？」

「瀬名河！ 変な言い方するなよ！？ 特に手中に収めるって所だ

！」

「女の子を………手中に収める？」

「麻友！？ 待て待て待て！ 普段は物静かなクールビューティキヤラなのにどうしてこのタイミングでその沈黙を破るんだ！」

結局、このやりとりも、いつもと変わらない。

変わらなかった。

ただ、俺はこの時気がつかなかったのだ。

このいつもと変わらないやりとりの中に実は、『変わった事があったのだ』、と。

下校時。

俺はただ一人、歩いていた。

美少女転校生事、麻友は美少女委員長の瀬名河と一緒に女の子同士で仲良くシヨッピングに行った。

まあこれも親睦を深めるとやらなので問題は無い。

スマートフォン
携帯のアプリで適当に遊びながら歩いていた。

普通はこんな事しないのだが、今歩いている道はこの時間帯になると人通りは少なく、ほとんど誰も居ないので携帯をいじりながら歩いていても問題は、無い。

「.....ん？」

パリッ、という小さな音が響いたと思うと、すぐに携帯の電波は突如 圏外となった。

おかしいな。

この携帯の会社は結構電波が良い事で評判が良い上に、この辺りには電波を阻害する物は、無い。無い、ハズなのだ。

まあ、たまにはそういう事もあるだろう、と思い、気もそがれた俺はアプリを終了し、すっ、と前を見てみると

「何か」が、居た。

そう。

「何か」、だ。

「ソレ」が何か解らない。

なぜなら「ソレ」を俺はどう言葉で表現したらいいのか解らなかつたからだ。

あえて、言うならば。

「ソレ」は、光だった。

光の玉。

光玉。

大きさ的には人で例えると小学生ぐらい、だろうか。

そしてその光玉が、俺に向かって、飛び掛ってきた。

「ッ！」

俺はとっさにその光の玉を、避ける。

俺のすぐ側をその光玉が過ぎ去り、そして着地したかと思うと、すぐにまた、俺に向かって跳躍してきた。

慣れてきたぞ。

こづいうのには、もう。

そもそも夏休みとこの前の瀬名河の件で二回目だ。

「これも……超能力だろっ!？」

俺は、かろうじて反応する事が出来た右手でその光の玉を掴みにかかると。

しかし、光の玉はそれを、かわした。

いや、かわした、というよりもこれは「逃げた」と言う方が正しいような気がする。

それぐらい急だった。

「逃がすかつ!」

俺はすぐさま追跡を開始する、が。そうは相手もさせてはくれず、その光の玉は、次々と「雷撃」と放ってきた。

「なッ! かみ、なり!？」

俺はとつさに腕をクロスさせ、ガードの体勢をとる。
アビリティ・イーター
能力喰いの能力が発動し、そしてその雷撃を、「喰った」。
正確に表現するならば、「喰った」というよりも雷撃が「消えた」という表現の方が正しいだろう。

丁度、俺の体に雷撃が吸い込まれるような感じだ。

直後に、俺の中に少し満たされたような感覚が入る。

そして、雷撃は終わらなかった。

次々と、まさに閃光のように連続攻撃が放たれる。

「ッ………!」

俺はそれを、防ぐ事しか出来ない。

なにしろ相手は雷だ。

たかだか人間ごときの反応速度ではかわす事は出来ない。

だがしかし、俺も何も考えていないワケではない。

ちゃんと、「切り札」はある。

ただそれを出すには少しばかり腹を満たさなければならぬ。

だが、それももう少しだった。

いや……………「もうそろそろ」、だ。

「……………行くぜ！」

俺は迫り来る雷撃を「目」で「視て」、そして、「避けた」。

そのまま、地面をめぐり上げるぐらいに加速し、普段の俺からは想像もできないぐらいのスピードで光玉に迫る。

もう既に、光玉との距離は、0だ。

そのまま、アビリティ・イーター能力喰いの力を持った足で、光玉を蹴り上げる。

ドゴツ！！ と光の玉はそのまま中を舞う。心なしに、光が少し弱まったような気がする。

……………いや、もうほとんど消えかけてきた。

地面になんとかフラフラと着地した光の玉はやがて光を失い、そして中から現れたのは

「なっ……………！ ウソ、だろ……………？」

人、だった。

それも他人じゃあ、無かった。
それは俺がよく知る人間だった。

「真菜．．．．．!？」

そう。

ついさっき俺を襲った能力の正体。

今路上にフラフラの状態で立っているのは、

それは、俺の「こっち」での始めての友達、中後真菜だったのだ。

「左右吉．．．．．たす、けて．．．．．助けてよ．．．．．」

頬に一筋の涙を流し、そのまま真菜は路上に倒れこんでしまった。

「ぶはあゝ。生き返るうゝ」

とりあえず、真菜を俺の家の中にあるリビングへと運んでからしばらくして、真菜は目覚めた。

目が覚めたかと思ったら、突如俺のキッチンにある冷蔵庫の中から「ごそごそとオレンジジュースを引っ張り出し、そして「ぐくぐくと飲んだあと、オッサンのような事を言い出した。

「オッサンかお前は」

「ふふん。今時のオッサンを侮っちゃいけないよ。最近、女の子は年上派が多いんだから」

「だからと言ってお前がオッサンになる必要はなくね!？」

「あつ。それもそうか」

気がつけよ。それぐらい。

そんな俺の心の中のツツコミが終わると同時に、真菜はコトツ、とオレンジジュースの空になったコップをテーブルに置いた。

「どこから話せばいい?」

「別に。話さなくてもいいぜ」

どこから、とは勿論超能力の事だろう。

それなりの理由も、真菜にはあるのだろう。

「言うておくが、さっきの事は気にすんな。超能力は、こっぴつの慣れているから」

「………優しいね」

「お前ほどじゃねーよ」

「報酬なんか出ないよ?」

「いらねーよ」

俺はお前には感謝してるんだ。

こっちの高校に来てから、周囲に誰も頼るヤツが居ない俺に話しかけてきてくれたヤツが、お前だけだったんだからな。

「うん。いいよ。話す。左右吉だしね」

その信頼はどこから来ているのかが気になるがまあ、一応聞くとしよう。

真菜が超能力を手に入れた、いや、目覚めたのは、つい最近の事だそうだ。

しかしその時は瀬名河のような半暴走状態のような事にはならず、徐々に、少しずつ、能力を使いこなして行ったらしい。

そして、能力をほぼ完全に使いこなせるようになったのがつい昨日の事だそうだ。

だが、能力は本当の所は完全には使いこなせていなかったのだ。

真菜は突如、俺に恐怖感を抱き始めたそうだ。

理由は解らないらしいのだが、とにかく、俺が怖かったそうだ。

……今思えば、おかしかった。

そもそもアイツの頭をなでてやるといつも決まって変なあえぎ声を出すのに、出さなかった（出さないに越した事は無いが）。

そしてアイツはこう言った。

「おっはよー左右吉。相変わらず怖い雰囲気かもしだしちゃってえ」

怖い、と真菜は言った。

恐らくそれは、真菜が俺に抱いた恐怖感というのは恐らく、俺の

能力、アビリテイ・イーター能力喰いが原因だと思われる。

この能力は他の能力にもちよつとした影響を与えるようで、先日戦った瀬名河の能力の塊である火の鳥も、俺のこの能力喰いアビリテイ・イーターに恐怖感を抱いていた。

真菜の能力が俺を襲ったのも恐らく同じ事で、俺という存在が、怖かったからであろう。

それを俺は真菜に、説明してやった。アビリテイ・イーター
ついでに、俺が夏休み、この能力喰いという能力を手にした事も。

「大変だったねえ。左右吉も」

「まあな」

「これから、どうする?」

「決まってる」

俺はすくつ、と立ち上がり、そして、真菜を見据える。

「喰うんだよ」

俺はさっそく、麻友に電話をし（携帯を持たせておいてよかった）、深夜、公園に集合した。ここは地元アビリテイ・イーターの山の麓にあるので人けは無
いのでまずは一安心だ。

とりあえず真菜にはこれから行う事を説明する。

真菜の暴走する能力を麻友の力で覚醒させ、俺がそれを喰らい、

そして、麒麟は構成が終わったのとはほぼ同時に、俺に向かって駆け出してくる。

速い……………!!

ゴッ! と、雷が俺の目の前で、放たれそしてそれは、俺の足元に直撃した。すると、巻き上げられた石つぶては次々と勢いよく俺の体に命中してゆき、俺に確実にダメージを与える。

そうか。コイツ、俺の能力喰い^{アビリティ・イーター}を一度「視た」から、学習したのかッ!

物理攻撃は超能力ではないので「喰らえない」。

「チッ!」

俺は麒麟につかみかかろうとするが、さすがは雷。

その速さは伊達ではなく、すぐに俺との距離を離し、雷撃でけん制してくる。

これは喰らってやりすぎすが、再度、同じ攻撃をしかけてきた。

正直、この攻撃だけは防ぎようがない。

そもそも相手は雷だ。

速すぎる。

……………だがしかし、幸運だったな。俺は。

通常のままだとやばかったかもしれないが幸い今は、放課後の戦闘で少し腹が膨れている。あの「モード」も少ししかなっていなかつたので、対して「空腹」ではない。

これならあと数回のけん制を「喰らえば」、「成れる」。

測20メートル、と言った所だ。

この跳躍力、というより身体能力として、理由をあげるなら、これは能力喰いの裏ワザ、喰らって満たされた能力を「発散」する特別モード、

バースト
発散モード。

満腹の状態で発動すれば効力は約5分続く。

その5分間のみ、俺は普段の身体能力の100倍の力で動く事が出来る。

しかも、能力補正付きで。

よって、あの一瞬の間に衝撃を全てなぎ払い、20メートル跳躍する事など、造作も無い事だ。

そのまま俺は放たれる雷撃を避け、麒麟に迫る。

因みにこのモードでもちゃんと能力は「喰らう」事は出来る。

真菜は、言った。

「左右吉………たす、けて………助けてよ………」

助けて、って、言った。

元氣そうで何よりだ。

しかも真菜は元々ある程度能力を使いこなしていたので、暴走能力が無くなった今では、しっかりとコントロール出来るようになっていた。

本人いわく、「電気操作能力って便利だね〜。色々な電子ロックとかも簡単に外せるし、ネット上にも干渉出来るし」との事だ。悪用する気まんまんじゃねーか。

ただまあ、俺は満足だ。

友達を、助けられたから。

「報酬」も、貰えた事だしな。

放課後。

真菜は俺に、こう言ってきた。

可愛い女の子のように笑みを見せ、そして、言ったのだ。

「ありがとねっ。左右吉」

その笑顔が、何よりの報酬だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0256z/>

超能力を喰らうモノ 弐

2011年12月1日00時51分発行